

ブッチール像とアリヴェー像

Busts of Ichikō Professors Sit on Komaba Campus

田村 隆

TAMURA, Takashi

二つの胸像

東京大学駒場キャンパスに“^{ルヴェソンヴェール}Lever son Verre”というレストランがある。旧制第一高等学校以来の同窓会館洋館を改装した駒場ファカルティハウスの1階に入っていて、その中庭にブロンズ製の二体の胸像が立つ(図1)。本郷キャンパスを歩けばあちこちでこうした像を見かけるが(木下直之編『博士の肖像―一人はなぜ肖像を残すのか』東京大学出版会、1998年)、駒場には不思議なほど少ない。おそらくはこの二体のみではないか。ともに明治35(1902)年の像で、学内の肖像の中でも早い時期の製作である。『学内広報』第1292号(2004年6月)には2004年5月7日に行われた除幕式の記事が載る。



図1

明治時代に旧制一高の教壇に立った外国人教師二名(フランス人アリヴェー先生、ドイツ人ブッチール先生)の胸像(弥生キャンパスに建てられ、一高の駒場移転とともに移設されていたもの。東大紛争時に破壊されるのを避けて、一時長野県に移して

注1 <http://hdl.handle.net/2261/00077200>

あった。)が、今回、駒場ファカルティハウスの中庭に再建されたことを記念して除幕式を行った。

右手に立つのは旧制第一高等学校でドイツ語等を教えたフリードリヒ・プッチール (Friedrich Putzier, 1851～1901) の像である。大坂七太郎 (= 岡島辰五郎 (1880～1962)) 作、沼田一雅 (1873～1954) 輔。一高で薫陶を受けた門弟からの寄贈に対する狩野亨吉校長 (1865～1942、校長在任は1898～1906) の謝辞の草稿が残る【第一函／第一高等学校関係文書／一高1】(井上政久・井上佳世子編『狩野亨吉博士遺蔵文書仮目録』(2002年3月)の分類による。以下同)。

故勲五等フリッツプッチール君我第一高等学校ニ教鞭ヲ執ルコト十有七年懇切誘掖功勞顯著ナル者アリ 君逝クヤ其薫陶ヲ受ケタル者相謀リ其映像ヲ鑄テ之ヲ不朽ニ伝ヘ以テ感恩ノ誠意ヲ致サントス 是師弟ノ交誼ヲ厚クスル所以洵ニ学海ノ美事ト謂ハサルヘカラス 今ヤ銅像鑄治ノ功竣リ委員ヨリ之ヲ我校ニ寄納セラル 即チ地ヲ校庭ニトシ永ク之ヲ保置シ以テプッチール君ノ芳蹟ヲ留ム 庶幾クハ其功勞ヲ勤シ其門弟ノ誠意ヲ表彰スルニ足ラント爾云フ

明治三十五年十一月九日

分類番号を【 】内に記す資料は東京大学駒場図書館所蔵の狩野亨吉文書に含まれるもので、科学研究費基盤研究(C)「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」(研究代表者 田村隆)における調査成果の一環として、「東京大学教養学部創立70周年記念展示 一高校長時代の狩野亨吉一教養学部前史として」(東京大学駒場図書館、令和元年7月1日～7月17日)として展示した。その際のパフレットは東京大学学術機関リポジトリ (UTokyo Repository) において公開されているので参照いただきたい^{注1}。

この謝辞とともに保管される略歴【第一函／第一高等学校関係文書／一高1】を抜き書きすれば、1851年に「独ポメルン州アンダム県パッデロウに生る」、「グライフスワルト中学校」(1859～1869)、「グライフスワルト及伯林大学」(1869～1874)を経て、1880(明治13)年に「日本到来独乙領事館公使館」、明治17(1884)年1月に「東京大学予備門雇教師トナリ爾来継続して第一高等学校教師トナル」。明治29年に「勲五等双光旭日章ヲ授ケラル」、明治34年5月19日逝去。一高教授飯島正之助の狩野校長宛書簡(明治34年5月19日)【第八函／148-E-18】に「プッチール氏ハ十一時過家人ノ知ラザル間ニ頓死致居候由」とある。

プッチールの死を悼んで、『校友会雑誌』第108号(明治34年6月20日)には、独乙法科三年の上小澤潜による「プッチール先生みまかりたるを悲みてよめる歌」10首が並ぶ。いくつかを紹介する。

うせましゝ君か知らせを学びやに見しときわれは夢と思ひき

おもしろきドイツの書^{ふみ}を笑みながら教へましゝはき^{昨日}なうと思ふに

み墓^私べの夏草たれかはらふらむこの日の本に妻子^{めこ}すまずして

師のきみの柩おくりてかへるさの夕べさびしく小雨ふるなり

はるばると東のそらをながめてはたゝ泣きまさむ君か妻子は

ひんかし^東の小さき島の岡のへにとはに眠るかゼルマンのきみ

プッチールの妻子はこのときまでにドイツに帰国していたのであろう。妻のエンマ・プッチール(Emma Putzier, 1851～1907)はプッチールの一高着任前、夫妻で築地居留地に住み、この頃に外国人の子供を教える私塾を開いたことが、ヘルマン・ゴチェフスキ編『近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究—お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に』(科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、2019年3月)に指摘される。立浪澄子氏によれば、エンマ夫人は1896年からGreifswald市Karlplatz3/4の住所で市の文書に登録されているという(「草創期の保育者養成をめぐる総合的研究(1)—松野クララとその教え子たちの歩み—」科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、2013年6月)。それがドイツへの帰国を意味するのであれば、明治13(1880)年のプッチール来日から数えて17年目、プッチールの死の5年前ということになる。

翌35年のプッチール像の除幕式には当時一高生であった斎藤茂吉(1882～1953)も参列している。一高が今は農学部のある弥生キャンパスにあった頃のこと、その時の様子が「呉秀三先生」(『斎藤茂吉随想集』岩波文庫、1986年)に書き留められている。

明治三十五年の秋頃か、明治三十六年の春のころかに、第一高等学校の前庭で故第一高等学校教師プッチール氏 Fritz Putzier (1851-1901) の胸像除幕式が行われた。その時第三部一年生であった私がおおぜいの生徒らの後ろの方に立って、式の行われるのを見ていた。

冒頭に掲げた狩野校長の謝辞草稿の日付「明治三十五年十一月九日」を考えれば、「明治三十五年の秋頃」の方が正しい。

一方、左手の胸像はフランス語等の教師のジャン・バティスト・アルチュール・アリヴェー (Jean Baptiste Arthur Arrivet, 1846～1902)。一高在職中にフランス語の辞書編纂に関わったことなどでも知られる。『校友会雑誌』第118号(明治35年6月16日)に「アリヴェー先生の訃」が載り、「プッチール先生逝いて正に一年、忽焉として又アリヴェー先生の訃を伝ふ」として、明治35年5月13日の逝去を伝える。プッチール像が建つ半年前のことであった。

先生西暦一千八百四十六年十二月を以て仏国ポルドウ府に生れ、わが明治十年万里の波濤を越えて、来りて東京外国語学校に教鞭をとらる。爾来大学予備門の時代を経て今に至る正に二十有五年、循々として教へて倦まず、孜々として勉めて急らず、苟も我校にありて、仏語を学べるもの先生の力に依らざるものなし。本邦仏語学界に貢献する所や寔に大なりといふべし。

像の原型作は後に桂浜の坂本龍馬像(昭和3年)を手がけた本山白雲(1871～1952)。鑄造は山本鹿洲・山本桃郎。「故アリヴェー氏銅像建設費決算報告書」(明治37(1904)年5月、故アリヴェー氏銅像建設委員)には「金四十円 東京美術学校ニ於ケル懸賞金」とあり、コンペが行われたのであろうか【第七函／博士宛書簡(ア1)】。東京美術学校は東京藝術大学の前身。ちなみに、建設にかかる総収入額は681円67銭、総支出額は602円20銭とある。『校友会雑誌』第133号(明治37年1月31日)には「故アリヴェー先生銅像除幕式」の記事が載り、「雪意を帯びたる雲低く、凍らん許りの北風寒き一月の十六日、午後二時といふに、仏法文科諸子の催によりて故アリヴェー先生の銅像除幕式を行ふ」とある。式次第は以下のものであったという。

先づ幕を除き、今村教頭仏文を以て故先生の略歴を朗読せられ、次いで梅博士、大学生藤井実君、及び仏法科石川剛君の弔辞朗読あり。終りて今村教頭は銅像を本校に寄附する辞を述べられ、之に対する校長の答辞ありて式終る。嗟、先生逝いて既に一歳と又半歳余、温容再び仰ぐ可らずと雖も、今や銅像功竣りて永しへに其面影を残さんとす。諸子夫れ春の朝、秋の夕、此像の前に立ちて長く先生の名を記念せよ。

ここにある「校長の答辞」とは狩野亨吉校長によるもので、その文面は狩野亨吉文書の中には確認できないが、先に掲げたプッチール像への謝辞のような形で答辞が述べられたのであろう。

本郷から駒場へ

それでは冒頭に見た2004年の除幕式は何の除幕であったかという、このとき新調されたのは台座である。現在の像の台座(図1)に記された、英文による二人の略歴を書き写しておく。

Friedrich Putzier (1851-1901)

Born in Germany, Friedrich Putzier came to Japan in 1884 and served at the First Higher School (Ichiko) for more than 16 years as a lecturer in German, Latin and World History until he died in Tokyo in 1901. He used to say that Japan was his adopted homeland.

Jean-Baptiste Arthur Arrivet (1846-1902)

Born in France, Jean-Baptiste Arthur Arrivet came to Japan in 1877 to teach French, Latin, Philosophy and World History at the First Higher School (Ichiko). For 25 years, he contributed to French language education in Japan.

一方、先の決算報告書にはアリヴェー像が建てられた当時の写真が添えられている(図2)。新旧の台座を比較されたい。尚、東京大学文書館所蔵の松野士十旧蔵資料(松野信司氏寄贈)の中にもこの決算報告書と銅像写真が含まれる。封筒の表書は「松野士十殿」。森本祥子氏の教示による。

駒場博物館所蔵の「一部三年三之組」卒業写真(明治37(1904)年5月、宮内幸太郎撮影)を見ると一高生に交じって後列中央に、同年1月16日に除幕されたアリヴェー像が見える(図3、同館のデータベースより転載)。場所はプッチール像と同じく弥生キャンパスの一高本館前で、周囲の木々や建物も決算報告書に同封された写真と一致する。前列中央に狩野亨吉校長が座る。

当時の絵葉書にも胸像が写ったものがあるので紹介しよう。図4は旧制高等学校記念館資料研究委員の谷喬氏所持の一枚である。旧制高等学校記念館の展示パネルで紹介されている。一高本館の前に



図2



図3



図4

注2 <https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400100014.pdf>



図5



図6



図7



図8

見えるのはプッチール像で、八角形の台座と銘板の位置(図2のアリヴェー像の銘板より低い)に注目されたい。庭木に隠れているが、本館の外壁沿いにアリヴェー像のものと思われる台座の下部も少し見える。図5(架蔵)も木で台座の上部が見えないが、図4とは設置場所が異なり、アリヴェー像であろう。その他、奥田教久「二つの銅像」(『旧制高等学校記念館』第32号、2004年3月)にも正面から撮ったプッチール像の絵葉書が紹介される。

昭和10年9月14日、一高は農学部とのキャンパス交換に伴い、本郷から駒場に移った。その時にプッチール像とアリヴェー像も駒場に移された。図6からは移転後の記録である。この写真にはアリヴェー像が写る。東京大学総合研究博物館小石川分館所蔵のデジタルアーカイブに含まれるもので、松田陽氏の教示による。図7・図8はいずれも一高図書館(現駒場図書館)の絵葉書(架蔵)でヒマラヤ杉も今よりずっと若い、よく見ると左右の植え込みに像らしきものが確認できる。台座の形と銘板の位置

からすると、プッチール像が右手、アリヴェー像が左手と思われる。また、図9の駒場博物館所蔵の空撮写真は明寮(昭和12年竣工)や900番教室(昭和13年竣工、当時は倫理講堂)が建つ前だが、一高図書館の左右に像が小さく二体写っているのが見える。台座も右手は八角形、左手は四角形である。尚、この写真には1号館の南東側の庭に今もキャンパスに残るオリーブの叉木が写っているのも当時の姿を留めるものとして興味深い。この木の歴史については拙稿「一高のオリーブ」(『東京大学環境報告書2018』2018年9月)を参照されたい^{注2}。

駒場博物館には昭和12年3月の駒場キャンパスの図面があることを折茂克哉氏に教示いただいた。図10の「第一高等学校建物及工作物配置図」によれば、「⑦銅像」として二箇所が示され、一高図書館に向かって右手には八角形、左手には四角形が書き込まれている。台座の形と思われ、プッチール像とアリヴェー像に対応する。

一高時代はこの配置が続いたと思われる

るが、それではなぜ今日は場所も異なり、台座も異なるのだろうか。それにはほぼ同時期に起きた二つのことが影響する。

一つは学生運動である。先に挙げた奥田教久「二つの銅像」によれば、「1968-69年の学園紛争で、ゲバ学生により破壊され、行方不明になっている」時期があったという。保全のためであろうが、胸像は台座とは別に、教養学部図書館の一



図9

室「駒場資料室」や旧制高等学校記念館で保管された時期を経て、2004年に新たな台座の上に再登場したのである。

もう一つは教養学部図書館（現アドミニストレーション棟）の建設である。一高時代から使い続けた図書館（現駒場博物館）の狭隘化のため、1968年に新図書館が建てられた。そこはプッチール像が置かれていた場所であり、台座を含めて移設措置が必要だったはずである。奥田氏は、「この二つの銅像はわれわれ生徒の知らぬ間に、駒場へきちんと移設されていた。駒場の

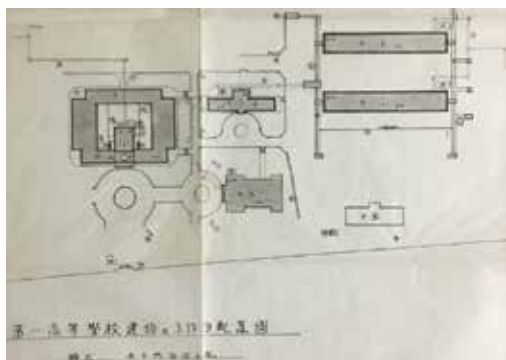


図10

旧一高図書館（今は教養学部的美術博物館になっている）に向かって左の植え込みの中に今も台座が残っているが、アリヴェ先生の台座は完全に破壊されている」と述べる。この文章が書かれた2004年時点で、旧台座は駒場博物館の左手にある植え込みにあったことがわかる。左手に元々あったのはアリヴェ像のはずだが、ここで「今も台座が残っている」と言われるのは誰の台座であろうか。

モニュメントのゆくえ

それから16年を経た今、旧台座はこの植え込みにはすでにない。2007年に102号館の裏に移されたことが岡本拓司「駒場Iキャンパスに残る「明治」」(『教養学部報』第504号、2007

FRITZ PUTZIER,
LEHRER AN DER DAIICHI-KOTOGAKKO
1884-1901
—
GEWIDMET
VON SEINEN DANKBAREN
SCHUELERN



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15

年7月)に指摘されている。移設当時の102号館裏の写真を折茂克哉氏から借覧したところ、プッチール像とアリヴェー像二体の台座が写っており、二体とも一緒に移された可能性が高いことが判明した(図11)。ということは、元は右手にあったプッチール像の台座も、新図書館建設の際に左手の植え込みに一度移され、二体の台座がそこに揃っていた時期があったのだろう。先の奥田氏の文章は、元々そこにあったアリヴェー像だけでなく二体とも「左の植え込みの中に今も台座が残っているが」、そのうちの「アリヴェー先生の台座は完全に破壊されている」という意であったことがわかる。写真に見える銘板の文字を記しておく。尚、アリヴェー像の銘板はこの時点ですでに剥がされ失われていることが写真からもうかがえる。

この時の移設からさらに13年が経ち、現在の102号館裏は紫陽花や雑草などで鬱蒼とした茂みとなっている。2019年7月5日に折茂氏・松田氏・大学院生の川下俊文君・鶴田奈月さんと5人で旧台座を探したところ、土に埋もれたプッチール像台座の銘板部分は見つかり、上部のプッチールの名前と第一高等学校まではどうにか読めたが、アリヴェー像の台座は特定できなかった(図12)。冬に草木が枯れてからは、銘板裏の「台石図案 十二町」(岡本氏によれば「十二町貞吉」)などの文字も見えやすくなり(図13・14)、アリヴェー像らしき四角形の台座の一部も奥側に確認できた(図15)。「破壊」(奥田氏)というよりは「分解」の印象であった(その意味では、今はプッチール像の台座も分解されている)。胸像というモニュメントのゆくえを追うことで、それを作ったり、移したり、壊したり、再建したりしてきた明治以来の人々の姿が一高と教養学部の歴史の中に浮かび上がってくる。その一端を物語る旧台座についても末永く保存することが望まれる。

狩野亨吉文書には、ドイツに帰っていたプッチール夫人に対しての狩野校長のドイツ語書簡の草稿(1903(明治36)年3月20日付)も残る【第二函／博士書翰／封6】。日本でいえば旧字体に相当するような、ドイツ特有の古い手書き筆記体で記された書簡の読解に際しては石原あえか氏の全面的な教示を得た。氏の御厚意により、以下に書簡の原文と訳文を掲げる。草稿原文に見られる推敲の跡は見せ消ちで示してある。

Tokio, 20.3.03.

注3 石原氏によれば、草稿ということもあり若干不自然な箇所が見られるとのことだが、原文のまま掲載した。

Sehr geehrte Frau Putzier!

Ihre werthe Zuschrift vom 17. Januar habe ich richtig empfangen. Mit Freude habe ich sie gelesen und daraus erfahren, wie /welch/ hohe /Anerkennung/unsere geringe, aber doch aus ~~ganzem Herzen~~ /aus dem Innersten des Herzens erwiesene erflossene [?] 鉛筆書き校正で判読困難] That bei Ihnen ~~anerkannt worden ist.~~ / gefunden hat. Es macht uns wirklich eine große Freude, daß dieselbe Ihre gute Meinung von uns aufs neue bestärkt hat. Gerne Ihrem Wunsche ~~willfahrend~~ gemäß werde ich Ihre /gerne/ freundlichen Worte den betreffenden Comité-Mitgliedern und den Herren, die bei der Enthüllung gesprochen haben, mitteilen.

Zum Schluß erlaube ich mir, meine herzlichsten Wünsche für /auf/ Ihre und Ihrer Kinder Gesundheit auszusprechen.

Mit bestem Gruße

Ihr ergebener K. Kano 注3

東京, 1903年3月20日

プッチール様

拝復 1月17日付のお便り、確かに拝受しました。嬉しく拝読、私どものささやかながらも心の底から溢れ出た[?]行いを高く評価いただけたとのこと、喜んでおります。あなた様の御意見が、私たちを改めて励まして下さり、まことに光栄です。ご希望通り、貴女のご親切なお言葉を、本件担当委員や除幕式にスピーチした関係者の皆様にも必ずお伝えいたします。

最後に貴女とお子様方のご壮健を祈念致します。

敬具

プッチール令夫人

K. 狩野

【封筒表書】

Via Amerika	アメリカ経由
Frau E. Putzier,	E. プッチール様
Bahnhofstrasse W.	駅通り W
Greifswald	グライフスヴァルト
Deutschland	ドイツ

【封筒裏書】

Abs. K. Kano,	差出人 K. 狩野
Dai ichi Kōtō Gakkō,	第一高等学校
Hongo, Tokio,	本郷, 東京
Japan.	日本

宛先の Greifswald (グライフスヴァルト) はバルト海に面する港湾都市で、今はメクレンブルク＝フォアポンメルン州に属す。中世にはハンザ都市として栄えた。「駅通り」は、先に紹介したエンマ夫人の住所、“Karlplatz 3/4”を指す。現在のカール・マルクス広場あたりという。略歴にも「グライフスワルド中学校」などとあったように、プッチール自身にとっても縁の深い土地である。

文面は、エンマ夫人による礼状(同年1月17日付らしいが現存しない)に対する返信と思われ、文中に「除幕式」(Enthüllung)への言及も見えることから、おそらくは前便でプッチール逝去への弔意、教え子の発意で胸像が建ったことなどを書き送ったのであろう。プッチールの墓は青山霊園の外人墓地にある。

(付記) 本稿の内容は、長野県松本市の旧制高等学校記念館における第24回夏期教育セミナーにおいて、「明治30年代の一高」と題して口頭発表し(2019年8月18日)、また東京大学文学部・大学院人文社会系研究科のオムニバス授業「東京大学の歴史資産―埋蔵文化財と文化資源―」における担当回、「駒場の文化資源―農学部と一高の面影―」(2019年10月23日)でも取り上げた。石原あえか氏、岡本拓司氏、折茂克哉氏をはじめ、多くの方々の御教示に御礼申し上げる。尚、本稿は科学研究費基盤研究(C)「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」による研究成果の一部である。文中で触れた狩野亨吉文書については校務関係文書を中心に写真撮影を進めており、「東京大学デジタルアーカイブズ構築事業」によるデジタル公開を目指している。